

私の環境学 ～川チャリのススメ～

瀧 健太郎

環境政策・計画学科

いい川を残したい

2017年4月に環境科学部環境政策・計画学科に赴任いたしました。2017年3月末までは、土木技術職員として滋賀県庁に18年間奉職してきました。県庁では、主に流域の治水・防災と河川環境に関わる業務に長く携わりました。具体的には、河川計画、多自然川づくり・自然再生、流域治水政策の企画・計画です。時には、死にたくなるくらい辛い日々もありました。決めることの大きさに足がすくんで眠れない日々もありました。けれど、未来のために地域に愛されるいい川を残したい、そのような覚悟を胸に抱き、多くの方々の力を借りながら精一杯挑み続けました。おかげさまで子どもたちに恥ずかしくないいくつかの成果も残すことができました。このように七転八倒した経験を通じて、川や流域の管理に関して自分なりにたどり着いたひとつの答えがあります。ここでは、そのことをご紹介します。

河川法という法律は、川の管理のあり方を定めています。治水・利水・環境という3つの目的を持っています。治水、利水、環境、これら3つのバランスをどうしていくか、河川管理の最大の課題です。例えば、治水のためにとコンクリート三面張りの川にしてしまうと、丈夫ですし洪水をはやくたくさん流すことができますが、生き物の棲みかを奪ってしまいますし、やわらかな風景も失われてしまいます。

では、どんな川が、3つのバランスが取れたいい川なのか。それは、地域から愛されている川だと、これまでの経験を通じ信じるようになりました。特に、子どもたちが遊んでいる川は最高です。子どもたちが遊んでいる川にごみを捨てようと思わない。また、たとえ三面張りコンクリートの川でも、地域の人びとから愛されている川は幸せな川だと言えます。個性があっているのです。その川なりに、地域のありようと繋がりの中で、治水・利水・環境のバランスが取れていると思うのです。

そのような地域から愛される川をつくりたい。これからは、滋賀県立大学環境科学部の一員として、いい川づくりに貢献し続けます。

この目で確かめよう

川の未来は杓子定規では考えられません。行政が押し付けるのはもちろんダメです。また、意見を聴くワークショップにたまたま居合わせたひとたちの意見だけで未来を決めてしまうのも、やはりダメだと思っています。昔から地域を育ててきた川の未来は、川と取り巻く地域のありようと繋がりについて徹底的に話し合い、その歴史も含めて知り抜いたうえで、ようやく「これだ」という姿が見えてくるものだと思います。

課題はいつも地域に根差しています。県庁でデータと睨めっこをしても解決策のアイデアは浮びません。

この目で確かめよう

同僚たちと、休みを使ってとにかく県内の川を自転車で見て回ろうということになりました。余呉川、姉川・高時川、芹川、犬上川、愛知川、野洲川、大戸川、安曇川、知内川、挙げればきりがありません。自転車で堤防を走ると、実にさまざまなのが分かります。自転車は便利です。気になることがあれば、すぐに止まってじっくり見聞きすることもできます。

巧みな人工のカーブ

上流から下流に向けて川は姿を変えます。流れの強さ・深さ、砂礫の大きさ、瀬淵のパターン、草木や魚の分布。川の線形と堤防の高低、河畔林の配置、まちの配置、田畑の配置。何度も走ると不思議とそれらの関係が繋がって見えようになってきます。地域の物語が見えてくるのです。とにかく面白い。今から60年以上前、昭和35年5月31日の朝日新聞（滋賀版）の記事をご紹介します。

「巧みな人工のカーブ

川ぞいを歩いてみるとよくわかるが、とにかく、よく曲がりくねった川だ。これが自然のものでなく、人工的になされているから驚く。手をつけたのは幕末の彦根藩主井伊直弼といわれる。屈曲点は「霞堤」という工法で補強がほどこしてある。カーブの外側、河岸から少し離れた場所に堤が作ってある。これ以外は低い土場。洪水になると低い堤の方へ

水を流して人家や堤防決壊を防ぐねらい。(中略)
両岸をコンクリートブロックで固め、川底をうんと広げて万全を期すと、県長浜土木事務所はいうが「霞堤」はそのまま残すのだそうだ。」

武田信玄、直江兼続、加藤清正、成富茂安などの戦国武将は、名治水家としても知られています。それぞれの地域で、水と大地の気持ちを懸命にくみ取りながら、民の安寧と石高の最大化を図ろうとした素晴らしい工夫がなされています。決して画一的ではありません。中国の春秋戦国時代、斉国の宰相管中は「善く国を治める者は、必ずまず水を治める」と言ったとされています。

流域思考で風土を守る

川のかたち、田畑、まちの配置そのものが地域を守っていました。自転車で堤防を走ると川づくりとまちづくりが一体だったことを実感できます。この風景はいかに合理的で美しいことか。そんな滋賀県の風土を守りたい、残したい。この気持ちがこれまでの僕の仕事を支えてくれました。もちろん、これからも川チャリを続けます。一緒に行きませんか？マニアの解説付きでお供します。

※本稿は、「近江地域学会」メールマガジンVol. 37 (2017年6月号) への投稿をベースに部分的に加筆・修正したものです。